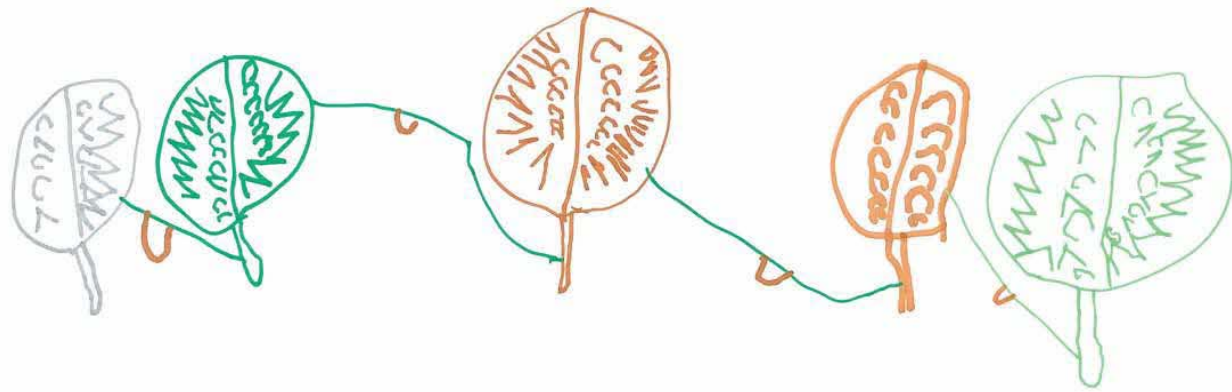


Be the Player

加賀市保育ビジョン
2024-2026

「学びの未来」を、0歳から。





加賀市の保育ビジョン

「学びの未来」を、0歳から。

「子どもは無限の可能性をもつ豊かな存在」。

これは、わたしたち加賀市が大切にしていきたい子ども観です。

子どもは生まれながらに自ら生きる力と学ぶ力をもっています。

この世に生まれたその日から、自らの力で世界を知ろうとしています。

一人ひとりが「生まれながらに有能で、豊かな存在である」ということです。

こうした加賀市の子ども観と保育ビジョンは、

北イタリア発祥の“レッジョ・エミリア・アプローチ”からの学びを踏まえ、

加賀市の保育現場に関わる先生たちとの対話から生まれました。

“レッジョ・エミリア・アプローチ”は、

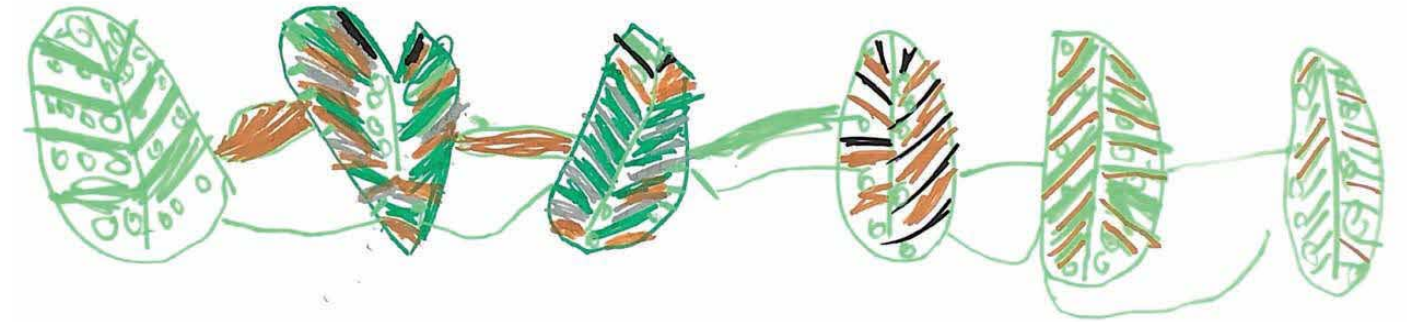
「子どもは有能で豊かな可能性を秘めた存在であり、権利の主体者である」

という考えを基本としています。

そして、子どもたちの興味関心を起点とし、自分で考え、表現し、探究していくこと、

創造性あふれる学びの探究プロセスを、

環境やコミュニティの参加を通して支えていくことを大切にしています。



加賀市には、誇れる歴史と文化、四季折々の素晴らしい自然環境、

そして何よりも、懐深い人々とのつながりがあります。

子どもたちが大きくなり巣立っていても、

「またここへ戻ってきたい」と思えるような居場所を教育から生み出していきたい。

そして、加賀市の学校教育ビジョン「Be the Player」

（自分で考え 動く 生み出す そして社会を変える）へとつながる、

0歳からはじまる加賀市独自の教育アプローチ（加賀市・アプローチ）を、

これから皆さんと共に育んでいきたいと考えています。

今、わたしたちは先行きが不透明で予測困難な時代を生きています。

そして、子どもたちはこれから、答えのない世界を生きていくことになります。

教育の未来を描いた「OECD Education 2030」では、

「複雑で不確かな世界を歩んでいく力」のひとつとして、知識やスキルの獲得だけでなく、

それらを幅広い領域に活用しつなげていくことの大切さが示されています。

また、「社会を変革し未来を育んでいく力」としては、

「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」

「責任ある行動をとる力」の3つのコンピテンシー（行動特性）があげられ、

何よりも、自分や地域コミュニティ、また共生するすべてのもののウェルビーイング（well-being）、

すなわち「豊かさ」を大切にしていく重要性が示されています。

まだ見ぬ未来を生きる子どもたちに、「豊かさ」を手渡していくために。

わたしたち大人は、子どもたちが目を輝かせながら心を動かす姿を中心に置き、

加賀市がもつまちの資源を最大限に使いながら、

まちぐるみで新しい保育・教育を創造していきたいと考えています。

保育目標

わたしたちの 子どもの育ちへの想い

一人ひとりの個性を尊重し、認め合う

Diversity and Inclusion : 多様性と受容性

創造性豊かに自らの表現を楽しむ

Creativity : 創造性

発見したり、考えたり、試したり、
確かめたりしながら自ら学ぼうとする

Curiosity : 探究心

保育方針

わたしたちが 大切にしていること

- 一人ひとりの心や姿に好奇心をもって耳を傾ける
- 子どもたちが自ら関わりたいと思う環境をつくる
- 子どもたちが自らやってみたいと思う気持ちや行動をつなげる
- 子どもたちの伴走者である大人自身が柔軟であり学ぶ気持ちをもつ
- 子どもも大人も互いの存在を尊重し、認め合う
- 子どもをまんやかに、家庭との連携を大切にする
- 地域の中で子どもたちを育むためコミュニティと連帯する

「学びの未来」を、0歳から。

子どもたちの興味関心を起点に学びを進めるにあたっては、
どのような環境を準備するのか、どのような問いを手渡すのか、
どのような協働をデザインするのかなど、
子どもの学びを支える大人の思考プロセスがとても重要です。
0歳からはじまる子どもの「探究的学び」を保障し、
より良い学びの環境をつくっていくために。
私たちは、6つのアプローチを大切にしながら、
教育的ドキュメンテーション（保育記録）を用いた対話と
保育者の専門的な研修を継続的にを行い、
子どもたちの探究的な学びに伴走していきます。



探究を支える6つのアプローチ

対話 （聴くこと・話すこと）

子どもの言葉に丁寧に耳を傾け、子どもの姿に向き合うことを大切にします。子どもと大人、子ども同士、大人同士、想いや考えを聴き、対話を重ねることにつながりを深め、学びの循環をつくります。

教育的 ドキュメンテーション

子どもたちの学びのプロセスの記録、家庭との共有、保育者同士で明日の保育をより良くするために、子どもたちの学びのプロセスを可視化するドキュメンテーションをつくり、学びの循環を促します。

環境は第三の教師

第一の教師は保育者、第二は子ども同士、第三は「環境」です。創造力を育むアトリエ、安心できる居心地の良い雰囲気と育ちを支える空間、地域コミュニティに開かれた場づくりなど子どもたちにとって豊かな「出会い」と「創造」の場をつくり出していきます。

少人数活動

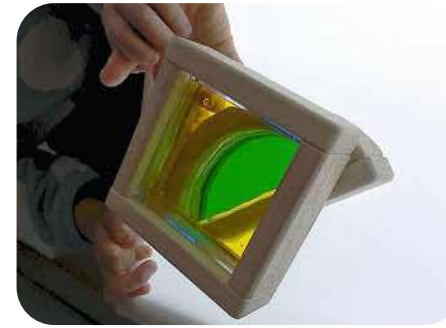
一人ひとりの想いや思考、声や姿を共有できる小グループでの活動は、学びの効果が高いとされています。子どもたちは相互に関わり合い、考え方や学び方を身につけていきます。

探究プロジェクト

普遍的なテーマと概念的な問いからなる「探究プロジェクト」を行います。子どもたちの興味関心を起点にプロジェクトをデザインし、子どもたちの協働的な学びを促していきます。

インクルーシブな 学びの環境

「探究的学び」が保障された環境において、それぞれの違いを個性として認め合い、互いに学び合う“わけない”環境とカリキュラムづくりを実践します。



園を拠点に、子どもとまちの関係を耕していく

加賀市のまちがもつ魅力を生かして、地域の人たちと一緒にまちぐるみで新しい保育・教育を進めていくため、私たちは2つのアプローチに取り組みます。

ひとつは、園からのアプローチ：

「園の人・コト・場を、まちの人々につなぐ」こと。
園やそこで育つ子どもたちの学びを地域に開き、まち全体を学びのフィールドにしていくことで、保育・教育を“まちのこと”として育てていきます。

そしてもうひとつが、まちからのアプローチ：

「まちの人々を、園や園の人々につなぐ」こと。
加賀市に息づく歴史や文化、伝統工芸、そこに関わる人々、豊かな自然といったまちの資源を新たな視点でリサーチし、保育につないでいくことで、子どもたちの学びをより豊かなものにしていきます。

こうした対話の循環を重ねていくことで、子どもとまちの関係性を深めていきます。

また、家庭や地域コミュニティが保育・教育に参加し、まちの文化を担う一員となることで、加賀市で生まれ育った子どもたちを含む、すべての市民のウェルビーイング（well-being）とシティプライド*の醸成を目指します。

*自分が住んでいる地域に対する誇り

地域における保育園の役割強化

保育園を「地域子育て相談機関」と位置づけ、子育て世帯との関わりを深め、家庭の悩みに伴走します。子育て応援ステーション、こども育成相談センターとの連携も強化していきます。

地域で暮らし、働く人
園に関わる人

保育者

子ども

家庭

園と保護者間の連絡手段のデジタル化

保育園と保護者間の情報共有を迅速・確実に行うため、デジタル化を推進します。また、現場のニーズに合わせて、連絡帳機能など新たな機能の活用を進めることで利便性の向上を図ります。小中学校でも同様のサービスを利用することで、子どもの育ちを切れ目なく共有することを目指します。

園からのアプローチ

1 子どもの姿をまちに開く 情報発信や対話の場づくり

公立保育園では、ドキュメンテーションや子どもたちのさまざまな表現を通じて、発見や学びのプロセスを紹介する機会を設け、子どもたちの姿を地域に伝えていきます。また、保育実践の様子や子どもたちの表現を、SNSなどを通じてタイムリーに発信します。

まちぐるみの 保育・教育を 実現する園づくり

子どもの興味・関心に寄り添いながら、地域と子ども、家庭や保育者間の橋渡しを担う「コミュニティコーディネーター」の配置を進めていきます。

まちからのアプローチ

2 子どもをまんやかにした まちづくり基本構想の策定・実施

子育てやまちづくりに関するニーズ調査の実施、住民参加型ワークショップの開催など、さまざまな意見や地域との対話の場を大切にしながら、地域資源の情報収集を行い、保育とまちをつないでいきます。そのうえで、子どもを中心とした、みんなが住みたくなるまちづくりを実践するため「子どもをまんやかにしたまちづくり基本構想」を策定します。

子どもとまちの関係をつくる 加陽保育園の獅子舞プロジェクト

子どもは、わたしたちのまちで生まれて育つ、
加賀市の大切なひとりの市民です。

加賀市の歴史と文化とコミュニティの中で、

子どもたちはどのように学び、育っていくのでしょうか。

そして、自分たちのふるさとをどのように感じて大人になっていくのでしょうか。

家庭や園を飛び出して、まちやまちの人たちと関わることで、

ふるさとである加賀市が大好きになり、誇りに思えるようになっていく。

ここでは、まちの文化や人との出会いが子どもたちの探究的学びを育んだ事例として、
加賀市立加陽保育園の獅子舞プロジェクトをご紹介します。

STORY

子どもと大人をつなぐ獅子舞の物語

自分たちでつくったダンボールの獅子頭とお手製の太鼓をもち、
毎朝、獅子を舞い、園内を練り歩いてきた5歳児クラスの子ども
たち。地域の伝統芸能・技術を体験できる施設「山中座」を見学
したことをきっかけに「本物」に憧れを抱きます。地域の青年団
や専門家との交流を経て、子どもたちは獅子舞に魅了されていき、
舞、太鼓、リズム、囃子、衣装と、探究は進んでいきます。その
姿に影響されて、子どもたちを支える周りの大人たち。獅子舞が
子どもと大人をつないだ物語のはじまりです。



1 どうしたら「本物」になるかを観察

子どもたちの憧れは南郷町の黒い獅子。地域の青年団から獅子頭
をお借りして、目や口、髪の毛が、どうしたら「本物」になるか
をみんなで話し合いながら観察し、材料を調達して「自分たちの
獅子頭」をつくっていきます。見た目だけでなく、操作性も考え
て試行錯誤を重ねます。園の夏祭りでは、この獅子頭を使って獅
子舞を披露しました。



2 つくること、舞うこと、調べること

「本物がきた！」加賀市の獅子頭を紹介した冊子『我らが守り神』
の作者・稲村行真さんと塩屋町の青年団の方が、たくさんの獅子
頭を持って来園。青年団の方からは舞を、稲村さんからは獅子舞
という伝統文化を守る3つのキーワードを教えてもらいました。
それは、「つくること」「舞うこと」「調べること」。この中の2つ
に取り組んでいるなんて「すごいことをしているんだよ」と言葉
をかけてもらい、子どもたちは真剣な表情で聞いていました。

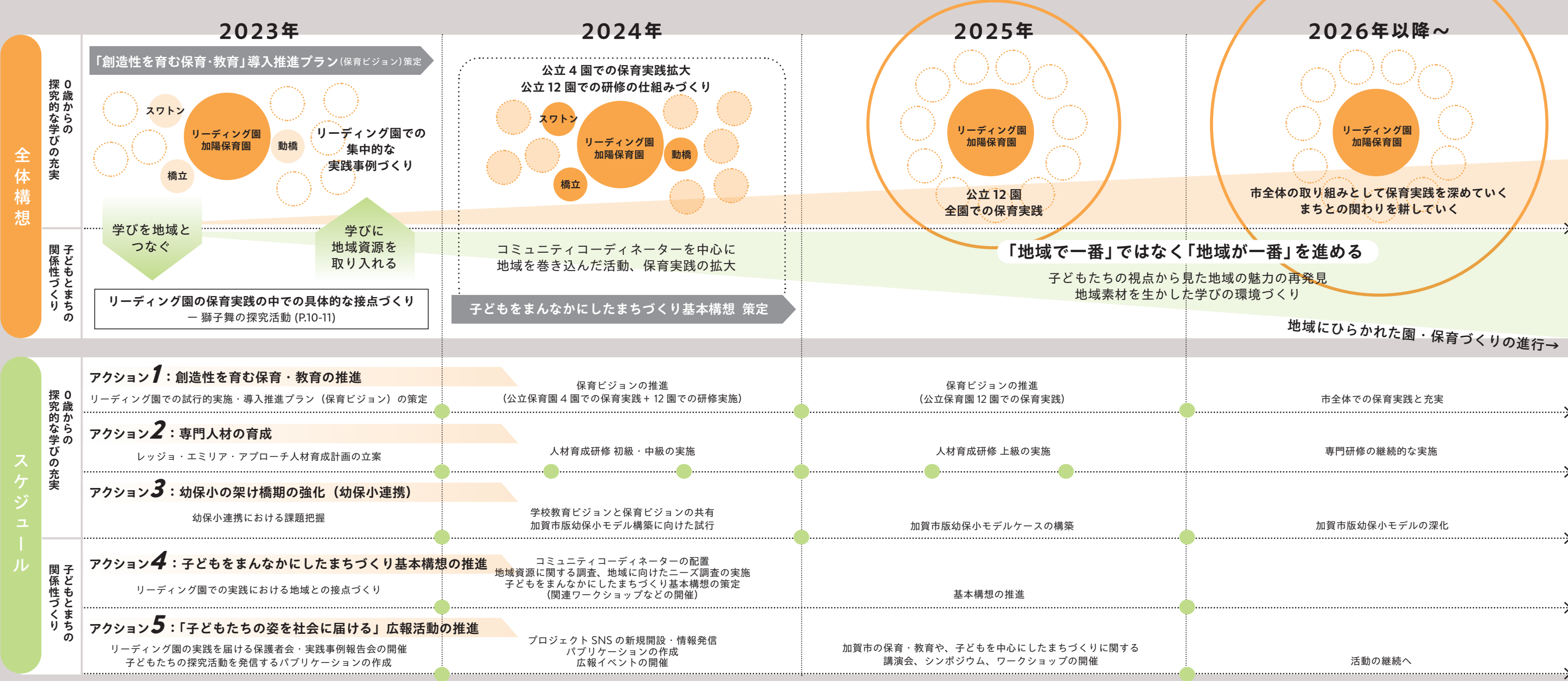


3 そして、伝統文化の継承者の一員に

子どもたちの獅子舞はまちへと広がり、南郷町の納涼祭や保賀町
の秋祭りからもお誘いの声がかかります。さらに、地域の人々が「太
鼓の台をつくらうか？」と声をかけてくれたり、子どもたちの発
案で家族と草履をつくったり、獅子舞はどんどん「本物」に近づ
いていきます。そして何よりも、獅子舞に向き合う子どもたちの
姿勢や意気込み、共に舞う姿に「本物」を感じます。子どもたち
は、5歳にして加賀市の伝統文化継承者の一員となったのです。



まちぐるみで取り組む、0歳からの学びの環境づくり



おわりに

加賀市の新しい保育ビジョンで大切にしている「子ども観」。
わたしたちは子どもを、生まれながらに“100の言葉”をもち、
無限の可能性を秘めた豊かな存在と考えます。

「子どもたちの100の言葉」(P.15) は、
教育思想家・実践者であったローリス・マラグッツィによる詞で、
レッジョ・エミリア・アプローチの根幹となる思想を表したものです。
子どもは人間として、100の言葉、100の考え、
100の表現方法、100の理解の方法をもっている。
子どもたちはさまざまな実体験それぞれを切り離すことなく、
織りなす思考を通して他者と出会い、学び合う。
子どもたちの力強い姿、限りのない可能性を表現しています。

わたしたち加賀市は、これまで大切にしてきた
“子どもたちの想いに寄り添う保育”を、変わらず育み続けていきます。
そして「子どもたちの100の言葉」の中で語られる彼らの姿から、
一人ひとりのもつ子ども観をあらためて振り返り、
レッジョ・エミリア・アプローチの学びを取り入れた
新たな保育・教育の取り組みを耕していきます。

Be the Player
「学びの未来」を、0歳から。
加賀市保育ビジョン 2024-2026

2024年3月31日発行
発行:石川県加賀市 子育て支援課
発行協力:まちの研究所株式会社
編集協力・デザイン:リライトW

special thanks : 加賀市立 加陽保育園、スワトン保育園の子どもたち

加賀市保育ビジョン



加賀市 子育て支援課
Instagram



冗談じゃない。百のものはここにある。

子どもは
百のものでつくられている。
子どもは
百の言葉を
百の手を
百の思いを
百の考え方を
百の遊び方や話し方を持っている。
百、何もかもが百。
聞き方も
驚き方も愛し方も
理解し歌うときの
歎びも百。
発見すべき
世界も百。
発明すべき
世界も百。
夢見る
世界も百。
子どもは
百の言葉を持っている。
(ほかにも、いろいろ百、百、百、)
けれども、その九十九は奪われる。
学校も文化も
頭と身体を分け
こう教える。

手を使わないで考えなさい。
頭を使わないでやりなさい。
話をしないで聴きなさい。
楽しまないで理解しなさい。
愛したり驚いたりするのは
イースターとクリスマスのときだけにしなさい。
こうも教える。
すでにある世界を発見しなさい。
そして百の世界から
九十九を奪ってしまう。
こうも教える。
遊びと仕事
現実とファンタジー
科学と発明
空と大地
理性と夢
これらはみんな
共にあることは
できないんだよと。
つまり、こう教える。
百のものはないと。
子どもは答える。
冗談じゃない。百のものはここにある。

——ローリス・マラグッツィ
佐藤学／訳



加賀市